

6 改訂にあたっての序言

○ 維管束植物

〈分類体系の変更〉

維管束植物類はシダ植物と種子植物を合わせた植物群であり、種子植物は裸子植物と被子植物とに分けられる。これまでの兵庫県版レッドデータブックでは、被子植物の分類は 100 年以上前から用いられてきたエングラー体系でまとめられていた。近年、被子植物の分類に関しては、DNA 解析に基づく分子系統分類の進展により、APG 体系と呼ばれる新しい分類体系が主流になりつつある。特に双子葉類が離弁花類と合弁花類とからなる従来のエングラー体系はもはや古いものとなり、双子葉類の中の科の範囲や配列には大きな変更がなされている。数年前からこの新しい分類体系による図鑑類が出版されるようになり、一般にも普及しはじめているので、今回からこの新しい APG 体系を採用することとした。

〈貴重性評価のランク区分〉

兵庫県版レッドデータブックでは、当初から貴重性評価の区分を A、B、C ランクで表してきた。初版、2003 年版は A、B、C 区分の基準には調査員の経験的な要素が多分に入っていたが、2010 年版ではその前年までに標本に基づいた兵庫県産維管束植物目録が被子植物最後の第 11 報まで発行されたこともあって、標本の産地や点数に基づいて生育している集団数や個体数を推定することが可能となり、A、B、C 区分に反映させることができた。その後、県内における貴重種の現地調査が進み、さらに明確な定量評価を行うことが可能となった。

今回 2020 年版の定量評価したランク区分では、現状で確認される集団数が 3 箇所程度までで、集団内で個体数が多くないことと、10 年ごとに個体数に急激な減少が見られる場合について A ランクとした。同様に、B ランクは集団数が 4~10 箇所程度、C ランクは 11~25 箇所程度までを基準としてそれぞれランク分けをした。新たな区分として、野生絶滅 (EW) を設定した。ハマビシを例とすると、A ランクの種として淡路島で保全されて残っていたが、近年産地が絶滅状態になり、栽培下でのみ生育している状態となった。このような例がいくつか出てきたため野生絶滅の区分を設けた。また要調査種には、本県での近年の分布情報が不足している場合と、分類学的再検討が必要なため現時点では評価できない場合とが含まれている。

〈環境省レッドリストの区分との関係について〉

2010 年版では貴重性評価の区分の解説に、A、B、C ランクが環境省レッドリストのそれぞれ絶滅危惧 I 類、絶滅危惧 II 類、準絶滅危惧に相当するという文言を入れ、定量評価を取り入れて評価するようになったことを示した。しかしながら、兵庫県版のランクと環境省レッドリストの区分との関係は単純なものではなく、実際の植物の状況を見て比較すべきと考えられる。今回の評価基準によりランクの区分けを行ったのち、区分けされた種の構成を見たところ、概ね A ランクは環境省の IA 類に、B ランクは IB 類に、C ランクは II 類および一部の準絶滅危惧種に相当するというのが最も相応しいと考えられ、そのような表記に改めた。

〈カテゴリー変更に影響を与える諸要因とランクの種数の現状〉

今回の改訂でレッドデータブックに掲載された種数は 6 ページの表のように合計 809 種に上る。各ランクの種数は 2010 年版と比較しても大きく変動しているのが分かる。このようなランク変動は様々な要因により引き起こされている。

最近大きな影響を与えているのは、シカ・イノシシなどの野生動物による植生の食害である。ため池・水辺の環境変化による影響も著しいものがあり、人為的な要因により管理が十分にできないことによる水質悪化や生育地の減少があげられる。人為的要因による環境変化の例としては草原環境についても大きな影響が出ている。高齢化などにより担い手が減少し、草原の維持管理ができなくなったことにより多くの草原性植物が消失あるいは絶滅危惧に瀕するようになった。外来種の侵入により在来種が激減するという現象が、特に水草では顕著に現れ、問題となっている。

このように様々な要因により兵庫県の自然環境は大きな変動にさらされており、植物の生育に大きな影響を与え、レッドデータブック記載種の種数が大幅に増加する原因となっている。とりわけ A ランクの種数が大幅に増加しているが、これらの中にはこれまでレッドデータブック未掲載だったが、ここ数年の間に上記諸要因により激減した種が多く含まれている。このような外部的要因のほか、調査の進展により新しく発見され、兵庫県新産種として A ランク入りしたものもかなりの数に上った。

B、C ランクにおいても種数の変動がみられた。B ランクでは、A ランクの場合と同様に様々な要因により A ランクへ格上げされた種が多かったが、同じ理由で C ランクから格上げされた種が多く、また新発見された種や未掲載種からのランク入りなどもあり、B ランクの種数は増加した。C ランクでは新しくランク入りする種より B ランクや A ランクへ格上げされた種が多く、全体としては種数が減少している。今回の改訂では B、C ランクの種をすべて精査することはできなかったため、今後これらの種について調査が進めば、レッドデータブック全体の種数は増加するものと考えられる。

(高橋 晃)

○ 蘚苔類

兵庫県は、瀬戸内海に面する比較的温暖で雨が少なく乾燥した地域、日本海側の低温で冬には雪に覆われる地域の両方が見られ、また氷ノ山に代表される山岳やその間を走る深い谷、各地の湿地などがあり、蘚苔類にとって多様な生育環境が存在している。これら多様な環境には、それぞれに特有の蘚苔類が生育しているのだが、兵庫県の占める面積の広さもあいまって、全域にわたってこれまでに十分な調査が行われたとは残念ながら言えない状況である。そのため、このレッドデータブックに掲載されている種も今後調査が進むと大きく変動する可能性がある。

現状における限られた情報をとりまとめてみると、ホットスポット（生物多様性が高い地域）とも呼ぶべき、貴重種が集中する場所がいくつか存在していることが分かってくる。これまでに明らかになった場所としては、神戸市六甲山周辺、丹波篠山市小金が岳の岩稜周辺、氷ノ山山頂域並びに瀬川山山頂付近の小湿地群、佐用町船越山の池の谷風穴周辺、そして新温泉町霧滝周辺などがあげられる。

六甲山の東端、奥池貯水池から甲山にかけては、小規模ながらも数多くの湿地群があり、各種の湿性植物が生育している。その多くは保護に伴う柵の設置によって湿原環境の陸地化の進行、特にササの侵入が顕著で蘚苔類にとっては逆に著しく環境が悪化している。仁川の甲山湿原の一部で 2010 年には確認されたヒメミズゴケは、当時も約 20cm 四方の小群落のみでしかなかったが、湿原の周囲の森の伐採に伴う乾燥化の進行により消滅していた。一方、芦屋市奥池町の数箇所並びに甲山第一湿原で報告されているハリミズゴケは、奥池小池ではイノシシによる水辺の攪乱によって消失しているが、イモリ谷湿地では生育を確認することができた。ただイモリ谷湿地ではオオミズゴケとの競争の結果か、10 年前に比べ群落の規模と数が減少している。ホソバミズゴケについては現存を確認することはでき

ず、今後の課題である。

六甲山紅葉谷は近畿中部では唯一のアオゴケの産地であったが、豪雨による大量の土砂堆積により生育地が完全に埋まってしまい消失したことが確認された。これにより、蘚苔類では初めて絶滅のカテゴリーを設けた。

小金ヶ岳の山頂直下の岩稜には微少な希少苔類が多く報告されているが、伐採の影響からかそのほとんどを確認することはできなかった。

氷ノ山山頂域には兵庫県内で唯一、亜高山性の蘚苔類（マツバウロコゴケ、テガタゴケ、クロゴケ、キザミイチョウウロコゴケ、サキジロゴケ、コアミメミゾゴケ、ミミケビラゴケ、フウリンゴケ、ヒメミズゴケ、キツネゴケ、タチハイゴケなど）の生育が確認されている。ヒメミズゴケの近畿地方唯一の産地である古生沼は近年乾燥化が進行しつつあるが、その周囲の小湿地を含めると現状ではヒメミズゴケの生育は良好である。また山頂北側直下にあるこしき岩は、稜線を吹き抜ける冷涼で湿った空気により独特の環境が維持されていて、特に苔類では貴重種の多くがこしき岩に集中していることは特筆すべきである。

さらに瀬川山山頂付近の林内の小湿地からは、2019年に兵庫県新産としてウロコミズゴケが発見・報告されていることである（松岡・秋山 2019）。また少し標高の下がった大沼湿原ではスギバミズゴケが大きな群落を作っている。小規模の群落ではあるが、ササオカゴケやフロウソウなどの生育も確認されている。

スギバミズゴケは注目すべき存在で、北海道・本州の湿原ではよく見かけられるが、近畿地方ではこれまで滋賀県から報告があったのみであり、しかも滋賀県ではその後再び確認されていない（埴田・笠井 2018）。陸地化の進行した大沼湿原の中央部、地下水位が高く雨の少ない時期でもよく湿っている場所で、高茎草本の根元にあちらこちらに大きな群落を作って生育している。調査した10月初旬では既に赤く紅葉している個体が多かった。2010年版では本種をゴレツミズゴケとして報告しているが、これは同定の誤りである。大沼から同時に報告されているホソバミズゴケは、ここでも見出すことができなかった。

船越山の池の谷風穴の出口からは、冷たく湿り気を含んだ空気が吹き出しており、この空気が常に流れている風穴から下の周囲10mほどは、周りの乾燥した低山地性の蘚苔類相とは画然と異なる、いわば亜高山の様相となり、一種独特の荘厳といってもよい雰囲気醸し出していた。ここには、珍品イシバコハネゴケだけでなく、ハイスギバゴケ、フタバムチゴケ、ヒメイチョウウロコゴケ、イチョウウロコゴケ、ミヤマフタマタゴケ、フォーリーイチョウウロコゴケ、クモマタマゴケ、キンシゴケ、ヌマゴケ、オカイヌノハゴケなどが報告された県内でも極めて貴重な生態系であり、2010年度の調査でも良好な生育が確認されている。しかしながら今回の調査では、原因は不明であるがおそらくは風穴口からの冷気の減少に伴って、周囲の乾燥化が著しく進行しており、これまでに報告されている多くの高山性の種の生育を再確認することができなかった。今後とも経過を見守る必要があるが、現状は憂慮されるものと言わざるを得ない。

極めて低い分水界を通じて日本海側・瀬戸内側が連続する場所は氷上回廊と呼ばれており、ここを通過して暖地性の種が日本海側まで分布を広げている例が高等植物ではよく知られているが、蘚苔類においてもマエバラムチゴケやヤマトムチゴケ、ヤスデゴケ属やクサリゴケ科のいくつかの暖地性の種が分布域を北上させているのがその例である。

その他、以前は兵庫県内で唯一、丹波市氷上町沼でクロカワゴケが確認されていたが、農業用の灌

概の関係で消失してしまっている。北部の小溪流を中心に探索を進めることで再発見される可能性もあると考えられる。

(参考文献)

- 松岡成久, 秋山弘之 (2019) 兵庫県新産のウロコミズゴケ (セン植物門ミズゴケ科). 蘚苔類研究 12(2): 60-61.
- 埤田 宏, 笠井 譲 (2018) 滋賀県のコケ植物とその分布. 滋賀自然環境研究会誌 16: 11-80.

(秋山弘之)

○ 淡水藻類

淡水藻類は湖、池沼、河川、水田などに広く分布し、水中に浮遊して生活するプランクトンや、石礫などの基物に付着して生活する付着藻（または着生藻）として生育する。湿った土や岩の上、石垣や木の幹の表面など比較的乾いた環境に生育する種類は、土壌藻または気生藻と呼ばれるが、これらも淡水藻類に含める。また、藍藻類は、原核生物の藍色細菌（シアノバクテリア）としてバクテリアに属するが、ここでは藻類の一分類群として扱う。

淡水藻類の種類は極めて多く、その多くは微小であるために顕微鏡を用いなければ観察できない。このため、すべての分類群を網羅することは難しい。また、専門家以外で淡水藻類の種の同定のできる人の数は少ないのが現状である。このため、種の選定にあたっては、藻体が肉眼で見ることができるところを前提とし、同定も比較的容易な種を対象とした。ただし、詳しい種の同定には顕微鏡が必要となる場合が多い。

以上を基本として、2010年版の作成後に得られた情報をもとに、今回は兵庫県新産の3種（紅藻類1種、車軸藻類2種）を含め、32種と1分類群を選定した。その内訳は、藍藻類1種、紅藻類14種、褐藻類1種、緑藻類1種、そして車軸藻類では15種と1分類群（イトシャジクモ類）である。主な改訂点は以下のとおりである。

紅藻類では、タニガワカワモズクの生育が新たに確認され、本種をAランクに追加した。2010年版の発刊以降に、チャイロカワモズクとアオカワモズクについては新たに生育地が報告され、今後も見つかる可能性が高いことから、今回の改訂ではBランクからCランクに変更した。カワモズクについても新たな生育地が報告されたが、湧水地が失われて生育が確認できなくなった場所もある。このことから、引き続きAランクとした。また、2010年版で情報不足のため要調査種としたツマグロカワモズクは、現時点で県内の生育地が1箇所であることが確認できたため、Aランクとした。ニシノカワモズク、チュウゴクカワモズク、ユタカカワモズクは今回も生育が確認されなかった。かつての生育地の環境変化が著しいことから、完全に消失した可能性が高い。

褐藻類のイズミイシノカワは、環境省レッドリストでは絶滅危惧I類に区分される。本種は紅藻類のタンスイベニマダラと混在することが多いため、引き続きCランクとした。しかし、タンスイベニマダラが安定して観察されるのに対して、本種の確認は減少傾向にあり、今後注視していく必要がある。

緑藻類では、タテヤママリモに学名を追記した。本種は現在も未記載種であるが、新たに組み換えられた *Aegagropilopsis* 属の一種と考えられる。また、中国産の *Aegagropilopsis moravica* とタテヤママリモの18sDNAの配列が一致するとの報告があることから、今回の改訂ではこの学名を採用した。

本種の学術的希少性を考慮して引き続き要調査種とした。

車軸藻類では、環境省レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類のシャジクモが、本県では水田によく出現し、全国各地の状況と比べて良好と判断されることから、引き続き C ランクとした。それ以外の車軸藻類については、県内での分布や生育状況に関する情報が不足していたため、2010 年版では要調査種とした。その後の調査で、県内での生育状況がある程度明らかになったことから、今回の改訂では多くの種についてランク付けを行った。

新たに生育が確認されたオウシャジクモとジュズフサフラスコモのほか、ヒメフラスコモ、フタマタフラスコモ、ヒナフラスコモ、ニッポンフラスコモ、セイロンフラスコモ、ミノリノフラスコモ、ハデフラスコモ及びナガホノフラスコモは、生育地が少ないことや生育環境が脆弱と判断され、A ランクとした。イトシャジクモ類、チャボフラスコモ（トガリフラスコモ）、ミルフラスコモ及びキヌフラスコモは、生育状況が A ランクの種よりも比較的良好と判断され、B ランクとした。オニフラスコモは情報不足のため、引き続き要調査種とした。

〈今後の課題〉

紅藻類の分布やその多様性は、湧水が存在する水域の環境特性と密接な関係があるため、その保全が望まれる。褐藻類のイズミイシノカワや緑藻類のタテヤママリモについては、その生育状況や分布についてさらに調査が必要である。

2010 年版に比べて、車軸藻類については種の選定とランク付けが大きく進展した。本県は全国一のため池を有することから、今後の調査により新たな種や生育場所が見つかる可能性がある。その一方で、車軸藻類は、ため池の水質の悪化や生態遷移による植生変化の影響を受けやすい。今後、管理が十分に行き届かなくなったため池が増加すると考えられることから、生育状況を注視していく必要がある。また、ため池以外に、車軸藻類は農業用水路にもしばしば生育する。農業用水路の環境は不安定で、年によって大きく変動するため、今後も追跡調査が必要である。

〈分類について〉

淡水藻類の分類については、DNA 解析に基づく分子系統分類の進展により、分類体系の見直しが進んでいる。それに伴い、カワモズク類では属名の変更が多く見られる。しかし、まだ広く普及する段階には至っていないものもあることから、ここでは主に以下の文献で用いられている学名および和名を採用した。

（参考文献）

- 廣瀬弘幸・山岸高旺 編（1997）「日本淡水藻図鑑」，内田老鶴圃。
- 熊野 茂（2000）「世界の淡水産紅藻類」，内田老鶴圃。
- 熊野 茂，新井章吾，大谷修司，香村真徳，笠井文絵，佐藤裕司，洲澤 譲，田中次郎，千原光雄，中村 武，長谷井稔，比嘉 敦，吉崎 誠，吉田忠生，渡邊 信（2007）「環境省「絶滅のおそれのある種のリスト」(RL) 2007 年度版（植物Ⅱ・藻類・淡水産紅藻）について」，藻類 55: 207-217。
- 環境省編（2015）「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－ 9 植物Ⅱ」，ぎょうせい。

（佐藤裕司）

○ 海藻類

海藻類は主として水中で生活する光合成生物、いわゆる藻類のうち海に生活しているものを指すが、実際にはある程度大型で岩などに付着して生活しているものに限定して使うことが多い。日本全体で1500～2000種程度、兵庫県で300種程度の分布が報告されており、一般に緑藻（アオサ藻）、紅藻、褐藻の大きく3つの系統群に区分される。

海藻類はそれ自体、沿岸域の生態系の重要な生物要素であり、中でもコンブ類やホンダワラ類などの大型の褐藻類は藻場と呼ばれる群落を作り、さまざまな生物の生育場となっている。また海藻類は定着性の生物であり、その生育は生育場の水質や透明度、波浪などの影響を強く受けることから、その生育場における環境の現況や変化を知る上での優れた指標生物でもある。しかし、海藻類のほとんどの種は生育期間（寿命）が数ヶ月から長くとも数年と比較的短く、また種類によっては一年の間でも肉眼で識別できる大型の体を作る世代と、肉眼では識別できない微小な世代が交代する生活史型（異形世代交代）を示す。このため、ある場所に生育する種の群落が季節的に肉眼では識別できなくなったり、生育場の環境変化により短期間で消失してしまったりすることが頻繁に起こる。しかしその一方で、孢子や卵などの生殖細胞の移動・拡散は比較的容易に起こるため、その種の生育に好適な環境の場には（あるいは一旦劣化した生育環境が再び生育に適した状況に復帰した場合）、比較的長期間観察されなかった種が再び移入・定着することも頻繁に起こり得る。これらのことから、出現頻度、希少性といった尺度だけで海藻類の生物多様性の保全を考えることは困難な場合が多い。そこで、海藻類の生育場の環境を保全するという観点から、その海藻類植生（藻場生態系）の中核となる種や成育環境を保全する上での指標となる種を貴重種として選定、指定することとした。また、瀬戸内海沿岸については、これまでの採集記録に基づいて、この沿岸域での採集記録が少なく、希少であると考えられる種、または過去に採集記録があるが、環境の変化などによって減少したと考えられる種について、地域絶滅危惧種（LE）として選定した。

兵庫県は瀬戸内海と日本海の2つの海域に接しているが、両沿岸に生育する海藻類はある程度地理的に隔離されており、また植生の成立に関わる地史的な背景、水温・波浪環境、汚濁・埋め立てなどによる生育場の環境改変の程度などで大きく異なることから、その植生や種組成には相当程度の違いが認められる。しかしこのうち瀬戸内海沿岸では1950年代以降、特に淡路島や大阪湾沿岸において比較的詳細な分布や種組成に関する調査が行われてきたのに対して、日本海沿岸での調査例はかなり少ない。このため、例えば淡路島においてこれまでに分布が確認されている種が180種程度であるのに対し、日本海沿岸においては1990年8月に行われた短期的な調査だけでも未同定種を含む168種が報告されており、本県では日本海沿岸は潜在的に瀬戸内海沿岸より大きな種多様性を持つと考えられるが、現時点ではその種多様性の全体像や日本海沿岸各地での種多様性の違いについてもきわめて限られた情報しか得られていない。この様な状況を踏まえて、本リストにおいては海藻類については瀬戸内海沿岸と日本海沿岸を独立して取り扱うこととした。

その結果、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類とされ、本県でも主として河口部などの汽水域での生育が確認されている紅藻アヤギヌ、ホソアヤギヌ、タニコケモドキを瀬戸内海・日本海両沿岸でBランクに指定したほか、瀬戸内海沿岸では藻場の重要な構成種となっており、環境の劣化により衰退することが危惧される褐藻ホンダワラ類のヤナギモクを、また日本海沿岸では同じくナラサモ、ヒジキをBランクとして指定した。一方、以前は比較的普通に見られたが、環境の変化などにより最近では確認されないか、極めてまれにしか確認されない種、及び分布限界に近く、水温環境の変化などによ

り消失する可能性がある種として紅藻アサクサノリを瀬戸内海・日本海両沿岸で、褐藻ホンダワラ、ウスバノコギリモク、紅藻ジャバラノリ、エゴノリ、ユルジギヌ、ガラガラ、フサノリを瀬戸内海沿岸で地域絶滅危惧種（LE）として指定した。

今回の改訂に当たり、2010年版の発行以降、淡路島周辺（由良及び岩屋周辺）及び但馬海岸（竹野）で継続的に実施されてきた藻場モニタリング調査と周辺海域における野外観察の結果をもとに、藻場の概況と出現種の変化について検討した。その結果、日本海沿岸の調査地点周辺では顕著な変化は見られなかった。一方淡路島南東部の海岸では、おそらく大型台風の接近によりカジメやヤナギモクなどの多年生の藻場構成種の衰退が認められた。また出現種についてはヒビロウド、フサノリ、ヤブレグサなどの、淡路島より南側の黒潮の影響をより強く受ける海域でよく見られる種が増加する傾向が見られたが、この期間の淡路島南東部での水温の顕著な変化は見られない。このため、これらの変化は水温環境の変化よりは藻場構成種の減少に伴う光環境（濁度）などの変化によりもたらされた可能性が考えられる。これらの藻場の概況及び出現種の地域的な変化は見られるが、本リストにおける掲載種及びランク変更を必要とするほどの変化ではないと判断した。ただし、一部の掲載種については分類の再検討により学名の変更が提案されており、改訂版においてはそれらの変更を反映した。すなわち、アサクサノリは以前 *Porphyra* 属に含められていたが、Sutherland et al. (2011)により *Pyropia tenera* (Kjellman) N.Kikuchi, M.Miyata, M.S.Hwang & H.G.Choi とすることが提案された。また、ガラガラは以前 *Tricleocarpa cylindrica* と分類されていたが、Wiriadamrikul et al. (2013)によりこの海域に分布する種は新種 *Tricleocarpa jejuensis* J.Wiriadamrikul, Geraldino, Huisman, Lewmanomont & Boo とすることが提案された。

（参考文献及びモニタリング調査結果に関する情報サイト）

- 川井浩史，羽生田岳昭，寺田竜太(2019)「藻場生態系の長期モニタリング-淡路由良，竹野サイトの10年-」地域自然史と保全 41: 111-119.
- モニタリングサイト 1000「藻場」 <https://www.biodic.go.jp/moni1000/algalbeds.html>

（川井浩史）

○ 菌類

2010年に兵庫県版レッドデータブックに菌類がはじめて調査対象とされた。菌類はキノコ、カビ、酵母など広い範囲の分類群であるが、2010年版では肉眼で観察される大きさの子実体と言われるキノコに限定して選定を行っている。今回の改訂に当たり、2010年版と同様に菌類はキノコに限定して選定を行った。選定の基準等は概ね2010年版を踏襲しているため、そちらを参照していただきたい。

さて、2010年以降、兵庫県でもたくさんのキノコが新たに報告されている。2011年にはニカワラツシタケが神戸産の標本をホロタイプとして新種発表され、また、2019年にはダイダイアカキクラゲが神戸産の標本をもとにして80年ぶり再発見されるなど、2010年以降もキノコの知見はどんどんと増えているのが現状である。

兵庫県内で新たに発見されたキノコも増えていく中、今回の改訂では、44種の選定を行い、新規で5種を追加し、一方で2種をランク外とした。新規追加を行った種の中でカムムリタケは湿地帯という特殊な環境に発生する。湿地帯は遷移などにより減少しており、今回、湿地帯のキノコを要注目種として新たに選定した。その他、海浜性の特異な生態で希少なドングリタケはAランク、あいな里山公

園での発見や県立人と自然の博物館で報告のあった白トリュフの一種であるホンセイヨウショウロは要調査種、藍色に変色するアイゾメイグチは B ランク、紫色で変わった形態のオオムラサキアンズタケは要注目種として選定した。一方、ソライロタケとヒメヌメリイグチはランク外とした。これは、2010 年以降の調査で県内での発見が複数箇所で見つかり、また、安定的に発生が確認できており、他の種に比べると絶滅のおそれがないと判断したためである。2010 年よりも県内分布が増えているホンシメジやアケボノタケなどは、発生を確認できるのはまれであるため、引き続きランク内として掲載している。カラスタケとキツネノサカズキは、2010 年以降もほとんど発生を確認できておらず絶滅が危惧されるため B ランクから A ランクに変更した。アブラゼミタケはアブラゼミが減少している状況を考慮して要調査種から B ランクとした。シロネハナヤスリタケやヌメリアイタケは発生を確認できているが、発生量は減っているため要調査種から B ランクとした。マツタケの追加も検討したが、他のキノコに比べると収穫量はまだまだ多いため、今回の改訂でも掲載は見送った。ニカワラッシタケやダイダイアカキクラゲなどは全国的にも希少な種であるが、他県でも見つかる可能性が高いと予想されるため、今回の改訂では見送った。

最近の DNA の塩基配列解析に基づく分子系統分類の進展により、従来国内で用いられてきた「原色日本新菌類図鑑 I・II」(今関六也・本郷次雄編著、保育社、1987,1989) をベースとした分類体系は、古い分類体系となっているのが現状である。一方、国内で最新の分類体系を用いたまとまった図鑑は「増補改訂新版 山溪カラー名鑑 日本のきのこ」(今関六也他編、山と溪谷社、2011) のみであるが、ここに掲載している情報も最新とは言えない。そこで、分類体系は、「増補改訂新版 山溪カラー名鑑 日本のきのこ」の情報や海外の菌類サイト Index Fungorum の情報、そして国内で報告された文献等の内容を加味した情報を用いている。

今回の改定訂に当たり、当初は山上公人氏が菌類委員を務めていた。山上氏は、2010 年に専門委員会の菌類担当として取りまとめを行った兵庫県を代表するきのこ研究者で、アカダマキノガサタケやダイダイアカキクラゲの報告を行っている。氏は精力的に活動されていたにもかかわらず、2019 年に志し半ばでご逝去された。委員は幸徳が引き継いだ。氏のこれまでの活動がなければ今回の改訂は幸徳にはとてもできなかった。山上公人氏には謹んでお礼を申し上げたい。

(幸徳伸也)